

青色ヨーヨー

奄美市立小宿小学校 六年 新田 紗紀

夏休みの真つ直中。首の後ろの日焼けがひりひり痛い、夏の思い出。

ボクのお父さんとお母さんは、二人して働いている。だから、夏休みに入ると、ボクはおじいちゃんの家遊びに行くんだ。遊びに行く、っていうより、引き取られに行く。今までずっとそうだったから、ボクはおじいちゃんの家は、よく知ってる。それでね、毎年、おじいちゃんの家近くの公園で、祭りがあるんだ。えーつと、確か・・・海開きの前日にするんだけど・・・まあ、海の安全を願う祭りなんだって。ボクは、いつもおじいちゃんにつれられて、その祭りに行くんだよ。これから話す事は、去年の祭りの日の話なんだ。よく聞いててねー！

「おじいちゃん、はやく！もう祭りの声が聞こえてきたよ。」

「まあ、そうあせるな、けん。」

おじいちゃんはいつもまったりしてるんだ。今ももたもたくつをはいてる。もう、祭りが始まっちゃったよ。

「おじいちゃん。もう祭りがおわっちゃうよ。」

「終わるわけなかるうに。」

おじいちゃんをひっぱって、早歩きで祭りの会場へ行くと、すごい人の数で、すごくにぎやかだ。公園の周りには、ちっちゃな電球をつけた屋台が、たくさんでた。とうもろこし、たこ焼き、焼きそば、フランクフルト、わたあめ、かき氷・・・どれもこれももくもく白いけむりをあげて、おいしそうなおいがボクの所までとんできた。さっそく、おじいちゃんにたこ焼きを買ってもらって、おばさんたちが輪になっておどる、ぼんおどりを見た。ぼんおどりが終わったら、屋台を一つずつ見てまわった。ボクの目にとまったのは、屋台のすみにある、小さなプール。水を少しはっついて、そこにゴムをつけた小さな風船がういてる。

おじいちゃん、これなに？」

するとおじいちゃんは目を丸くして、

「おや。けんはヨーヨーも知らんのか。」

おじいちゃんは、屋台の人に百円をわたして、一つのヨーヨーをうけると、

「ほれ、こうやって・・・。」

中指にゴムのわっかになってる方をつけて、手を上下にゆらした。

「ばちばち」

「中に水が入ってるんじゃないよ。」

「へー。」

ボクはおじいちゃんのマネをして、ヨーヨーをばちやばちやらしてみた。おじいちゃんが買ってくれたヨーヨーは、きれいな青色で、それよりちよつと濃い青色が、波のような模様で、海みたい。ボクは何度もヨーヨーをばちやばちやらした。どんなに強くたたいても、絶対にわれないから、不思議だな。

しばらくするとおじいちゃんが、大きな声で言った。「あちゃ、しまった。」

「どうしたの？」
「お金をこれだけしかもってこんかったようじゃ。けん、ちよつと待つときなさい。すぐ家にとりにもどるから。」

おじいちゃんはきまりが悪そうにちよつと笑って、公園を出ると、早歩きで帰っていった。おじいちゃんはまったりしてるから、お金も忘れちゃうんだよ。ボクは、人の少ない公園の奥のベンチにすわって、おじいちゃんを待つことにしたんだ。ベンチにすわると、祭りのにぎわいが急に遠くに感じた。ボクだけちがう世界にいるみたい。おじいちゃんおそいな……。そう考えていると、となりのベンチに男の子がすわっているのに気がついた。小さい男の子で、浴衣を着てる。ん？泣いてるみたいだ。お母さんとはぐれたのかなあ。

男の子はずつと泣いてる。いつまでたっても泣きやまない……。しょうがないなあ。

「君、どうしたの？」

ボクが聞くと、男の子はふと、ぐしょぐしょの顔をあげた。

「あのね、落とし物をしちゃったの。すごく大事な物なのに……。」

「なんだ、落とし物か。どんなの？いつしょに探してあげようか。」

ボクが言うのと、男の子は、こう言うんだ。

「あのね、それがね、ぼくにも分からないの。」

「ええ？なんだよ、それ。」

「あのね、ぼくたちキツネはね、この日になるとね、大天狗様からね、碧玉をもらうの。碧玉はね、山中のキツネたちがもらうの。それでね、ぼくももらったんだけど、すごい光で見えなかったの。それで、お祭りに夢中になってる間に落としちゃったみたいなの。どうしよう……。」

男の子は一気に言うのと、一息ついた。

「ん？キツネ？ねえ、君、ホントの事言わないと、ボクいつしょに探してあげられないじゃないか。」

「ホントの事だよ。」

「……まったく。おじいちゃんがよく、

『いまだきの子どもは……』

なんて言うけど、なんとなく気持ちかわかるなあ……

「あのねえ、君。キツネというのはね、黄色いフサフサのしっぽがついててね、耳がピン、ってとんがってて、顔もツン、としてるんだよ？君は人間にしか見えないよ。」

「あ、しっぽならば、もってるよ。」

すると男の子は得意げに、おしりの下から、黄色いフサフサしたのをボクに見せた。

「今は人間に化けてるだけだよ。人間に知られたら、

絶対ダメなんだって、お母さんが言ってた。」

「んー、君、キツネだったって、そうは見えないけどなあ。」

「ホントにホントだよ……あつ、しまった！人間に知られちゃダメなのに！どうしよう、ぼく……ぼく、碧玉もなくしちゃって、人間にも知られちゃったら、大天狗様にしかられちゃうよう！」

そう言っつて、男の子は泣きだしてしまった。なんだよ、自分からしゃべったくせに……。ボクは正直まだ、キツネだといいはるこの子の事を、信じたわけじゃないけど、この子がかわいそうになったから、

「分かったよ、キツネだって事はだれにも言わないから。じゃあ、早く、その碧玉ってのを探しに行こうか。」

「うん。」

男の子はすっかり泣きやんでいた。

「でもなあ、探しに行くっていつてもなあ。どんなものか分からないんじゃないなあ。」

すると男の子は、

「あ、それならば、一度お母さんから聞いた事あるよ。たしか……あ、あれ！」

男の子は、さっきのプールを指さすと、そこにむかって、つけてけ走っていった。

「こんなのだった。」

「ええ？ヨーヨー？それならばボクも持ってるけど……じゃあ、これが落とし物？」

すると男の子は首をかしげて、

「ううん。ちがうと思うよ。」

ボク達は、あつちこつちを探し回った。ヨーヨーにている、青い木の実とか、ちっちゃなボールとか、ボクはたくさん男の子に見せてみたけど、男の子は首を横にふるばかりだ。

「見つからないなあ。」

「見つからないなあ。」

ボクはふと、気がついた。

「あ、おじいちゃんが心配してるかもしれない。」
ボクが言うと、男の子は泣きそうになって言うんだ。

「ええ、もう見つからないの？」

「そうだなあ。これだけ探しても見つからないんだもんなあ。」

『もう、あきらめたら？』

と、ボクが言おうとした、その時。生ぬるい風がざあっとふいた。

「あ、大天狗様が呼んでる。」

男の子はさつと顔色を変えると、ボクの手をつかんだまま、山のほうへ歩いてけ走っていく。

「おい、どこ行くんだよ。」

山奥へ行くにつれて、ボクは、男の子の走るスピードが、どんどん速くなってる事に気がついたんだ。速くなっていくにつれ、ボクはどんどん不安になってきた。どこへ行くんだろう……。何か言おうとしても、強い風が顔に当たって、上手くしゃべれない。ボクはひきずられないように、足を必死に動かした。周りの木々が、線になって見える。ジェットコースターみたいだ。ボクはだんだん目が回ってきた。止まってくれ！目が回りながらも、男の子の頭に、ぴん、ととがった耳があるのが見えた。ホントにキツネだったんだ……。ボクがうつすらそう思っていると、男の子が急に足を止めた。そして、さつと正座をすると、ボクにも正座をするように、目で合図した。ボクは目が回って

るから、なにがなんだか分からないだろ？ほとんど夢の中のできごとのようで、太い木の根がはっている、やわらかい土の上に正座をした。

「大天狗様、ごめんなさい。ぼく、碧玉をなくしちゃったみたい。海はもうダメなのかなあ。」

目の前には、大きな木があった。大きな木には、大人が三人ぐらい、ゆったり入れるほどの、大きな穴がいている。そこから声が聞こえた。

「その『大天狗様』ってのはよしてくれよ。はずかしいじゃないか。」

どこかで聞いたことのある声だな……。ボクはぼおつとそう思った。

「海の事は心配しなくても大丈夫じゃよ。おや、となりの子どもは？」

男の子……。もうすっかりキツネの姿をしていたけど……。は、こつちをむくと、

「えつと……。碧玉探しを手伝ってくれたんだ。キツネってこと、知られちゃったけど……。」

「そうか、まあ良い。今すぐお礼を言いたいのだが、時間が無い。」

大きな穴の中から、人影がびよん、とこつちに飛び降りてきた。ボクは、まだクラクラする目で、その人影をよよく見てみた。暗闇の中の人影を見たボクはび

つくりしちゃって、また目が回ったよ。なんとその人影はね、

「おじいちゃん！」

するとその人影もびっくりしたようで、

「おや！けんだったのか！暗いから分からなかった！」

「おじいちゃんって、天狗だったの？」

おじいちゃんは、だいぶあわててるようで、うろろろしてるみたい。

「いやその・・・天狗じゃあ、ないんだけどな・・・。

まあ、今は時間がないんじゃない。けん、そのヨーヨーをかしなさい。」

ボクがいいよ、って言う前に、おじいちゃんはボクの中指からヨーヨーをぬきとると、山の奥へちよっと走って、向こう側に、ぼーんと投げた。たしか向こう側には海があつたはず。海の真上には、まん丸な月が出ていて、おじいちゃんが投げたヨーヨーは、丁度月と重なって、中の水が、きらつと光った。すると、

「ぱしゃーん。」

ヨーヨーがわれたんだ。でも、中からでてきたのは、水じゃなくて、青い光。それと同時に、あっちの山からも、こっちの山からも、海に向かって青いヨーヨーみたいなものが投げられた。蛸みたいに、海に向かって、ふうわり、と落ちていく。あっちこっちでわれる

音がして、青い光が山全体をおつた。青い蛸は、海にゆっくりとしずんで、暗闇の中で、海がかがやくのがはつきり見えた。その光は、まん丸な月よりも明るかった。

「あれが碧玉だったんだ・・・。」

男の子が、ぼつりと言った。

「さあ、そろそろ帰ろうか、けん。」

帰り道、おじいちゃんは、いつものようにまったり

歩きながらこう話した。

「おじいちゃんだってな、けんみたいに子どもの時があつたわけだ。それでけんみたいにおじいちゃんのおじいちゃんといっしょにこの祭りにきてたんじゃよ。そうしたら、けんみたいにちっちゃな男の子と会って、その男の子はまだ見習いの天狗だったんだけどな、大きくなったら大天狗になりたいと言っておつた。」

おじいちゃんは、遠くに見える祭りの光を、目を細めて見て、

「ここの山のキツネはな、毎年『碧玉』つちゅうのを海に放り投げて、海の神様を呼ぶんだと。また一年間海をよろしく頼みます、ってな。それと同時に、海の色をとりもどす、とも言つとつた。おじいちゃんも初めて知つただけだな、海の青色は、ちよっ

とずつうすれていくそうなんじゃ。だから、春の海は優しい色をしとるんじゃね。それで、毎年海開きになると、碧玉をしずめて、色をとりもどすんだと。

その碧玉は、月が海の真上のきた時に、こちら辺の山のキツネがみな同時に海に放らんと、神様は聞いてくれんそうだ。だから大天狗の合図でいつせいに投げるんだと。でもなあ、その大天狗がな、ケガをしてしもうて、力いっぱい碧玉を海に放れないと。おじいちゃんは、ボクに、悲しそうな顔をしてみせた。

「その大天狗は、人間がおこした火事でケガをしたんだと。それだけでも悲しいのに、その大天狗はな、」
「昔、おじいちゃんが会った天狗だったんでしょ？」
ボクが先手をうつと、おじいちゃんはこくりとうなずいた。

「そうじゃよ。おじいちゃん、天狗がかわいそうになつてな。せつかく大天狗になれたのに、仕事ができんとなるとな・・・。ほら、お金をとりにもどるといった時の事じゃが。天狗がわしに会いにきとった。屋根から声がすると思ったらな、はっはっ。それで、今年の大天狗の仕事は、あんたがやってくだされ。」
「と言うんだ。理由を聞いたら、断るに断りきれんくのお。まさか碧玉が、あのヨーヨーだとは思わん

かった。まあ、無事に終わって、よかったよかった。」
おじいちゃんは、話をしめくくって、にこ、と笑うと、

「さ、祭りはまだまだこれからじゃぞ。いっしょに焼きそばでも食べるか。」

公園は、今までいた、静かな山とは正反対。あつちこつちでおどりをおどって、相変わらず、白いけむりがもくもくあがって、おいしそうなにおいがただよっている。ボクはまた、ヨーヨーを買ってもらった。ボクのヨーヨーは、海の上でわれちゃったもん。

——— つとまあ、こつという話なんだ。君は信じる？
あ、セミの鳴き声が聞こえるね。今年もまた、夏休みが近づいてきた。もう、碧玉を見ることはできないと思うけど、海には絶対、あそびに行こう。だって今、ボクが泳いでいるこの海で、あの碧玉がはじけたんだ・・・そう思うだけで、どきどきしない？